

# 芦原温泉発祥の地



芦原温泉の歴史は比較的新しく、その発見は偶然のことであった。明治16年（1883）は早魁<sup>かんば</sup>で、温泉の発見地にあたる場所（堀江十楽）の地主が、旧暦の9月9日に灌漑用の井戸を掘抜師に依頼し掘削、翌朝、竹筒の栓を抜くと湯気と生温い水が吹き出したとされている。

これを機会に田中々、舟津など周辺一帯での温泉掘削がすすみ、翌明治17年には早くも何軒かの宿が開業し湯治客を泊めるようになったとされている。初期の温泉宿としては湯川屋湯川知方、山月亭（北岡多吉）などが知られている。明治17年5月5日に北岡多吉は個人名から『山月亭』に商号変更して再開業しているがその時の宿料は上等で23銭、中等20銭、下等15銭であった（後、上等は20銭、中等は18銭と各旅館で料金が統一されている）。

その後も、温泉の掘削熱は冷めず、その一方で、乱掘の懸念も高まったため、県は明治19年5月に田中々、舟津、二面、堀江十楽の村々に対して新規の掘削を禁止、また各温泉に衛生管理の通達も出すなど指導している。ちなみに芦原温泉は、二面温泉、田中温泉、舟津温泉の総称である。

これに先立つ明治17年春、県当局は泉源鉱脈の調査を行っているが、担当したのは石田二男雄と教員の大岩貫一郎である。石田は当時福井県庁に赴任していた農商務省の技師で、県内各地の地質調査を行っていた。国道8号の源流ともいふべき春日野道の基礎調査を行ったのも彼である。石田はまもなく福井を離れ農商務省に戻り農林学校の教授となつた。短い赴任期間であつたが、福井の地に足跡を残した。



芦原温泉の開場式は発見から8ヵ月後の明治17年6月1日に行われている。その前



温泉湧出地



戦前の芦原温泉全景

4月26日、舟津温泉場単独での開業式は暴風雨に見舞われ途中で切り上げに追い込まれたが、この日は前日までの悪天候とは打って変わって快晴であつた。会場は青竹の矢来に紅白の幕を巻いて囲み、入口の弓形の門には国旗を交差掲揚した。大鏡餅も飾られ、村井石介坂井郡長、菅原良三郎坂井警察署長その他郡役所の書記と各町村戸長が列席するなか、華やかに執り行われた。式典終了後は金栄楼で祝宴となつた。金栄楼では翌日に村人を集めての祝宴も開かれている。

その後、戦時体制、震災、芦原大火の災害を乗り越え、温泉は開場式から125年を迎えている。